

子育て支援に携わる徳島県内のボム・テアリーダーらが、子どもの健康や発達医療について理解を深める「はぐみ支援セミナー」(代表世話人・松岡優徳島市民病院副院長)が、徳島市の県立総合福祉センターで開かれた。ひまわり保育園(徳島市)の阿部浩紀主任が「自然に生きる保育」、清家卓也徳島大学形成外科医師が「レーザー治療について」と題して講演した。

子育て健康&医療

はぐみ支援セミナーから

自然に生きる保育

以前は、子どもは自然の中で子どもだけで群れになつて遊ぶ「子どもの世界」をつくっていた。しかし今は、屋内で大人が与えられたもので個々に遊ぶ「大人の世界」になつている。この状況が子どもの発達を妨げている。ひまわり保育園では2009年から4年間、自然の中で保育を体験するよう内容を直した。水や土、木、石、小動物、植物などの自然物で自由に遊べる環境にし、しつけや訓練は少なうした。

子どもが持つ力育てる



阿部さん

「子どもの抱える問題は大人の問題」と話す阿部浩紀さん＝県立総合福祉センター

「5歳の子どもに靴を洗濯して遊んだが、次第に靴が形が壊れてしまつた。泥団子を作つた子は生きる意欲や子ども本来の友達と遊ぶの多さを競い、自力を育てることができた。人間関係を築くのが難しく

川でつかまえたカマが同じ水槽に入れたザリガニを食べるのを見たときは驚いていたが、本来、ザリガニはカマの好物。自然では闘いが繰り広げられていることや、命の大切さを学んだ。木の小屋を通つたときは全員で協力して完成させ、社会性も身に付けた。このほか▽体力が向上する▽病気の回復が早くなる▽力がをしても我慢する▽子ども同士の間でのトラブルが減り自分たちで解決する▽身の回りの整理を自分からするといったことができるようになる変化がみられた。

種類で異なる治療法に

レーザー治療



清家さん

「あざの種類によって治療方法が異なる」と話す清家卓也徳島大学形成外科医師＝県立総合福祉センター

あざは、生まれつきあるいは生後、生じる皮膚の色素細胞や毛細血管、そのほか皮膚の構成要素の異常で起る。医学的には「母斑」と呼ぶ。色調によって赤あざ、青あざ、茶あざ、黒あざがあり、それぞれ治療方法が異なる。赤あざの一種であるイチゴ状血管腫は、7歳くらいまでに自然に消えるが、早

めに皮膚にたるみなく消失させた場合はレーザー照射をする。たるみが残る場合は切除手術をすることがある。乳児でまぶたに増殖すると、弱視の原因になるので早期の手術が必要な場合もある。同じ赤あざでも単純性血管腫はドラインクス療法や色素レーザー治療切除手術、植皮などが行われるが傷跡なく完全に消失させる治療法はない。青あざのうち太田母斑はレーザーがよく効く。反応できる異所性母斑は色の濃いものも早めの治療が望まれるが対象。希望があるものが対象。レーザーは、あざを薄く小さくできるが、万能ではない。

レーザー治療を行うが、ほとんどが再発するので治療は慎重に行う必要がある。黒あざ(先天性色素性母斑)は、まず切除手術を考へない。完全に消すことはできないので、積極的な治療をしない。機能的な治療性腫瘍やほかの合併症の可能性もあり、一度専門医の診察をお勧めする。次回は7月午後6時半から県立総合福祉センター。理大教授)と、「斜視・弱視(講師、島治伸徳島大学形成外科医師)。参加費100円。誰でも参加できる。

キラやすいといった今の子どもが抱える問題は、子どもが抱えられ子どもも変わる必要がある。家庭や地域社会を築く必要がある。